

## 登場人物

佐月（さつき）

アラフォーの専業主婦。眼鏡をかけたおっとりタイプのお母さん。ぽっちゃり体型で温厚な性格。

克俊（かつとし）

佐月の夫。一流企業に勤める。活力に溢れバリバリ仕事に励む。

貫太（かんだ）

佐月の一人息子。わりと大人しい。

麻田（あさだ）

???:?

専業主婦の私は、夕食の買い物を終えて帰宅した。ママチャリをガレージにとめ、膨れあがったエコバッグを抱え玄関に向かう。今日も、夫と息子のために腕によりをかけて料理に励もう。それは私の生き甲斐だった。

いつものルーティンで何の気なしに郵便受けに片手を突っ込むと、指先に触れるものがあった。取りだすと、B5サイズよりやや小さい封筒だった。形から、中身はDVDであるとすぐわかった。息子の貫太宛ての荷物だった。嫌な予感がした。

「…嘘でしょ」

思わず呟いてしまう。とにもかくにも家にあがった。心臓がドキドキしていた。嫌な汗が滲んだ。

「……ゴクッ」

キッチンにて、私は封筒とにらめっこする。なにも確定したわけではない。普通の映画やアニメのDVDかもしれない。気にせずスルーするのがきつと得策なのだろう。けれど私は何もたつてもいられず、勝手に開けるのはよくないとわかりつつも、つい封を切ってしまった。

「はあっ！」

息を飲んだ。果たして、それはAVだった。しかも、パッケージだけでもかなり過激なもの。正面向いて大きくお股を開いた若くて綺麗な女性が、その部分に下から思い切り男性器を突っ込まれている。勿論モザイクで隠蔽されているものの、立ちくらみを起こすほどの強烈な卑猥さだった。

「はあ…ああ…」

「ただいま」

間の悪いことに、そこに息子が帰ってきた。

「はあっ！お、お母さん！」

DVDを片手に立ち尽くす母親を見て、息子は全てを察したようだった。

この場合、本来糾弾されるべきは、勝手に荷物を開けた私の方かもしれない。けれど私は、愛する息子に言わずにはいられなかった。

「…貫太…ダメよ…こんなの…こんな…いやらしいの…見ちゃ…」

「はあ…ゴクッ」

「こんなの…よくない…こういうことは…愛し合う者同士でしなくちゃいけないことなのよ…それなのに…こんな不謹慎な…汚らわしい…う…うう…」

私は思わず、涙を流していた…。

「はあ…うう…くっ…こ…こんなものを作ってるのは…ろ…ロクな大人じゃないのよ…貫太…くっ…う…うう…だから…ダメ…ダメな

のよ…はあ…んっ…」

涙はとめどなく溢れ、止まらなかった。

「…お母さん」

貫太は、かなり悄然とした様子だった。

「…はあ…ご…ごめんなさいね…貫太…泣いたりして…お母さん…ちよつとびっくりしちやって…それに…荷物を勝手に開けたのも、ごめんなさい…これ…返しとくわね…」

封筒の中にDVDを戻し、私は息子にそれを渡した。

「…お母さん…ごめん…僕…これ…見ないから…すぐ捨てるから…」

貫太はそう言って逃げるように二階の自室にあがっていった。

「はあ…ああ……くっ…う…う…う…」

息子が去った後、堪えていた涙が再び溢れだし、それはしばらく収まらなかった。

※※※

「うん！美味しい！やっぱり母さんの肉じゃがは絶品だな！」

「そう？ありがとうございます。…まあ、私の腕なら当然ですけど。うふふ♪」

「あはは！言うなあ〜母さんは！」

数時間後。私はいつものように家族で食卓を囲んでいた。一流企業でバリバリ働き、厳しいビジネスの世界で日夜戦う夫は、必要以上に私の料理を褒めてくれる。優しくて遅しくて、本当に私なんかには勿体ない人だ。彼のためにもっともっと頑張らなければと、切実に思う。

「…貫太はどう？美味しい？」

私はさりげない感じで息子に聞いてみた。

「うん。とつても美味しいよ、お母さん。…  
い  
つ  
も  
あ  
り  
が  
と  
う」

「ふふふ♪…どういたしまして」

私も貫太も、すっかりいつもの調子に戻っていた。まるでさっきの出来事なんてなかったみたい  
に。

貫太だつてもう子供ではないのだから、ああ  
いうものに興味を持ったっておかしくはない  
のかもしれない。けれど正直私には、それはひ  
どくショックなことだったのだ。

母親のエゴかもしれないけれど、やはり息子  
にはああいう世界に触れずに生きていつてほ  
しかった。あんなの絶対間違っている。間違っ  
た性のあり方だ。

私は、この夕食の家族団欒の時間が好きだ  
った。息子もこの時間の温かさ・尊さを体感し

て、考え直してくれればと思った。目の前の屈託のない笑顔を見ていると、それも素直に信じられた。

息子には、正しい恋愛をして、正しい家庭を作って、足を踏み外し間違った世界に陥ることなく、真っ当に幸せになってもらいたい。

…今の、私のように。

※※※

翌日。いつものように夕食の買い物をして帰ってきた。少しドキドキしながら郵便受けに手を入れたけれど、なにもなかった。私はとてもホッとした。

飼っている犬のマルコのおトイレを掃除し



てから、入念に手を洗い、料理の準備にとりかかる。すると間もなく息子が学校から帰ってきた。けれどもいつもとは様子が違った。当然のことながら普段は勝手にあがってくる息子が、玄関にとどまり声をあげている。

「お母さーん。お母さーん」

「はいはい」

私は下ごしらえの手を止め、玄関に向かった。そして。

「!!!!!!!!!!」

息子の隣に立つ人物を見て、本当に卒倒するかと思った。

小柄な、痩せたおじさんだった。手足が異様に細長く全体的にヒョロヒョロで、頭は前髪がかなり薄くなり、なにか爬虫類を思わせて見るからに気色悪い。

年齢は、五十代後半ぐらいだろうか。けれど

その歳にしては情けないヨレヨレのTシャツとハーフパンツ姿で、非常にみすばらしかった。……もう十年以上経っているけれど、私にはそれが誰か一瞬でわかってしまった。

彼は、私の方を見てニヤリと笑った……。

「……………」

「お母さん。この人、お母さんに用事があるって言うから連れてきてあげたんだけど……お知り合い？」

「……………」

「……お母さん？」

「へ？あ、え、えっと……そ、そうなの。そうなのよ、貫太。この方は……お、お母さんのお客さんでね、ちよっとお母さんこの方とお話があるから、貫太は部屋に戻っててくれる？」

私は慌てて取り繕い、平静を装って言葉を紡いだ。

「ふーん。そうなんだ…わかった」

貫太は素直に従い、二階にあがっていった。

「はあ…ゴクッ」

「…にひひ」

口元にいやらしい笑みを浮かべたまま、その男性は改めて私に強い視線を送ってきた。

「…と…とりあえず…あがってください…こ

…こちらに…」

とにかく、彼との会話を息子に聞かれてはいけない。そのリスクが一番低くなるよう、一階奥の客間に案内することにした。

そこは畳の和室だった。普段使うことは滅多になく、掃除は行き届いているけれど、和風の座卓以外は家具もなにもない。私が入り、その男性が入り、襖が閉められる。

「ふふっ…偉くなったもんだな、佐月。こんな立派な家に住んで、あんな大きい息子がいて。

すっかり良いお母さんじゃねえか。信じられな  
いぜ、全く」

「……………」

「…でも、地味な眼鏡と、その髪型は…あんま  
り変わってないんじゃないか?…優しそうな  
可愛いタレ目も、俺好みのままだな、おい」

鎖骨辺りまで伸ばした、飾り気のない私のス  
トレートの黒髪を軽く撫でながら彼は嬉しそ  
うに言った。まるで昔を懐かしむみたい…。  
私はその手を払いのけることが出来なかった。

「体の方は随分ふっくらしたみたいだな…ム  
チュムチで美味しそうだ(笑)…いいぞ…俺好み  
だ…まさか俺が来ること、予想してたのか?そ  
れで俺のためにわざとぽっちゃりしたのか?  
ええ?」

「ど…どうして…来たんですか…もう会わな  
いって…約束だったじゃないですか…麻田

さん」

随分はしゃいだ様子の彼の言葉を遮るよう  
にして私は言った。その声は震えていた。彼は  
この家の場所なんて知らないはずだった。つま  
りわざわざ調べてやってきたのだ。

：私に、会うために。

「ははっ。麻田さんなんて他人行儀だな。昔の、  
慣れた言い方で呼べよ」

「そんな…」

「…いいから。…呼べよ、佐月」

正面に立った同じくらいの背丈の彼は、小さ  
いながらも異様に凄味のある声でそう言いな  
がら、高圧的な目で私の瞳を射抜くように見つ  
めていた。

こうされると、身動き出来なくなってしまう。  
命令に従うしか、なくなってしまう。

私の中のなにかが、それを、求めてしまう。

…とても、馴染みのある感覚だった。

「はあ…ああ…ご…ご…ご…ご…ご主人様」

私は十数年ぶりに、その言葉を口にしていた。

# キモ親父のデカチンポで 調教済だったお母さん

（私は「元」変態淫乱マンコ犬）

041

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件とは関係ありません。  
また、登場人物は全員十八歳以上です。

「なはは！いいねえ、その響き。やっぱりお前には似合うわ」

「ど：どうして：ですか：なんでなんですか：」

揶揄するような彼の笑いをスルーして、私は強引に話を再開した。

「ふふふ、いやね。最近飼ってた雌にちよつと逃げられてな。ありあまるエネルギーのぶつけどころを失っちゃってよ。：そういえば佐月どうしてるだろうって急に思って、軽い気持ちで探偵に相談したわけよ。そしたら案外簡単にここがわかってよ。なはは」

「：話が違うじゃないですか：もう絶対：かわらないって約束してくれたはずなのに：お金だって払いました：」

「にひひ、まあいいじゃねえか、昔のことはこ



の際。大事なのは、今だろ？…困るんじゃないか？今…俺とお前の関係を、息子にバラされでもしたら？」

「はぁあん！」

背中に戦慄が走る。やはり予想通りだった。彼は私を、脅迫しにきたのだ。

「な…なにが…目的なんですか？…」

「いや、そんなたいそうなものは要求しねえよ。別に金をせびったり、ましてやお前の幸せな家庭を、幸せな生活を壊そうだなんて、これっぽちも思っちゃいねえ」

「…ゴクッ」

彼は正面から私の目を深く覗き込み、言った。

「…佐月…一発ヤラせろ」

「くっ！！！」

「…今この場で…息子が同じ屋根の下にいるこの家で…昔みたいに思い切りマンコさせろ」

「はあ…ああ…」

「…大丈夫…一発やらせてくれさえすれば、今度こそもう二度とお前の前には現れねえよ。この一発で完全に終わりだ。約束する。だから…  
…な？」

「んんっ！！！」

私は反射的に仰け反ってしまう。麻田さんがいきなりハーフパンツと下着までズリさげ、男性器を露出させたのだ。それは既にギンギンにいきりたっていた。綺麗に皮が剥け、赤黒いグロテスクな亀頭が堂々と顔を見せている。

太く、長く、へその辺りまで反り返り、相変わらず怖気をふるうほどに巨大だった。夫のものなんて、まるで比べ物にならない。

「はあ…んん…ゴクッ」

「ほら…しゃぶれ…佐月」

「ああ…なあ…」

「おら…早くしろよ…今すぐこの姿のまま息子んとこ行って洗いざらい暴露されたいか？ええ？」

再びその口調に、有無を言わせぬ傲然たる響きが滲んでいた。

「ああ…ああ…」

私は唇を震わせながら、直立する彼の正面にひざまずいた。突如として出現した非日常の悪夢に、頭が変になりそうだった。怖かった。泣きだしたくなるほど怖かった。

でも、とにかくやるしかない。息子に、家族に、それを知られるわけには絶対にいかないのだ…。

（い…一回だけ…一回だけだから…それで…また…戻れる…し…幸せな…温かい世界に…すぐ戻れるから…）

私は自分にそう言い聞かせ、目の前の亀頭に

恐る恐る舌を伸ばした。

「くっ！」

途端に激烈な悪臭と苦味に襲われる。麻田さんは、ペニスを洗っていないようだった。それもきつと、かなりの長期間に渡って。見ると、カリ首の裏側に、異様な白に変色した汚い垢がべっとりとかびりついていた。

（はあ：臭い：臭い：もう臭すぎるよ：）

「え：えろ：れろろ：ん：えろえろ：」

それでも私は亀頭に密着させた舌を懸命に動かした。

「ひひひ：悪いな、佐月。最近全然風呂入ってなくてよ。だからチンカス溜まってるだろ？：：：  
ついでに掃除しといてくれよ。舌で舐め取って、  
勿論ごくんと飲み込むんだ」

「はあ：んん：えろ：れろろ：べろべろ：  
ん：れろっ：えろっ：ん：ゴクッ」

私は言われた通り舌先でチンカスを集め、当然のように嚥下した。胃が、カッと熱くなるような不思議な感覚がした…。

（はあ…ああ…）

「れろっ…んん…えろえろ…ぺろぺろ…ゴク…ゴクゴク…」

「ひひひ…いいねえ。言われた通りちゃんとチンカス食うんだな、佐月は。偉いぞ。…でもちよつと、お前にしては舌使い大人しくねえか？昔みたい…滅茶苦茶にやっちゃまえよ」

「んっ…えろ…ぺろ…はあ…そんな…」

「なんだ？…俺の命令が聞けねえっていうのか？…お前が今なにしてんのか…大声で息子に叫んでやろうか？」

「はあっ！ああっ！」

「…やれよ」

「んん…はあ…ゴクッ…ん…れろ…れろれろ

：れろれろれろ！えろれろべろべろえろべろ  
えろれろえろれろれろれろっ！」

私は自分でも驚くほど高速で、舌を回転させたのだった。そしてあちこち顔を動かし、あらゆる角度から積極的にペニスを舐めていく。龟头だけでなく、竿部分にも、真っ黒な金玉にも、見えないほどの速度で動く舌を堂々ぶつける。

「おほほ！いいじゃねえか！本領発揮じゃねえか、佐月（笑）！」

「えろえろえろれろえろ！べろべろべろべろべろべろべろべろべろべろべろべろ！」

（はあ！はあ！や：やばい！やばいやばいやばい！ばい！）

「おら！舐めるだけじゃなくて、じゅぱじゅぱしやぶれよ！昔のように！お前が一番輝いた頃のように！高速チンポじゅぱじゅぱやっちまえよ！佐月！」

「はあ！んん！んん！んっ…じゅぱ！じゅぱ  
じゅぱじゅぱじゅぱっ！じゅっぱあああ  
あ！ぢゅぽぢゅぽにゅぽにゅぽずぽず  
ぽ！ぬちゅぶちゅぬちゅくちゅぶちゅずちゅ  
ぐちゅぬちゅちゅううう！」

私はいとも容易く指示に従っていた。とても  
従順だった。巨大なペニスを口いっぱいにく  
りと頬張り、それに無茶苦茶にしやぶりついて  
いた。口内で激しく舌を暴れさせながら、亀頭  
を豪快に吸引した。独特の生臭い味が口内に弾  
けた。私は構わず、彼のお尻に両手を回すよう  
にして、頭を遮二無二前後に振り回した。口の  
隙間から唾液が派手に飛び散った。

（はあ！ああ！な、なにしてるの！なにしてる  
の！わ…私、なにしてるの！む…息子が…か…  
貫太がいる家で…なんてことしちゃってるの  
おおおお！）

私は自分自身の行動に、内心で衝撃を受けていた。でもその動きに、私は慣れていた。動き自体に対する驚きはなかった。何年もしていなかった。夫にしたことなど決してなかった。なのにその動きは、私の中に、きつとずっとあったのだ…。

（し…仕方ないじゃない…やらなきや…貫太にバラされるんだから…そんなの仕方ないじゃない…だから…今だけ…今だけ…一度だけだから…）

「んん！んん！ぢゅぱにゅぱぢゅぽぢゅぽ！にゅっぽにゅっぽじゅぽじゅぽじゅこじゅこずぽずぽ！ぢゅっぽおおおお！ぬぽぬぽぬぽぬぽぢゅっぽおおおお！」

「ああ、たまんね。よし、もういいぞ佐月。挿れるわ、チンポ。パンツ下ろして股開け」

麻田さんは、さもなんでもないことのように



言ったのだった…。

「じゅぷっ！にゅぽっ！ん…ぷはっ！はあ…  
ああ…ああ…」

ペニスを吐きだし、深く呼吸する。とんでもないことだった。絶対に拒絶しなければならぬ。私は人妻で、母親なのだから。

「はあ…んん…ゴクッ…」

けれど心が竦んだようにいうことをきかず、私はまるでそうすることが出来なかった。反抗して、もし本当に息子にバラされてしまったら。その時のことを想像すると足が震え、半ば思考を停止させ気がつくと言われるがまま彼に従っていた…。

立ちあがった私は長いスカートの中に下から両手を伸ばし、下着を下ろした。麻田さんは私に背中を向けさせ強引に中腰にさせると、そのスカートをめくりあげた。白いお尻が剥きだ

しになる。

そして立ちバックの体勢で、コンドームもなにもついていない男性器を、平気で女性器に突っ込んだ。

「そりゃ！」

「はああん！ああっ！」

思わずはしたない声が飛びでる。息子も同じ家にいるのだということを思い出し、慌てて右手で口を塞ぐ。

「にひひ！そりゃ！そりゃそりゃ！」

「くっ…んん…ぬ…んっ…」

「それそれそれ！なはは！やっぱいいな、佐月のマンコは！相変わらず肉褰がじゅこじゅこ絡みついてクソ気持ち良いぜ！はあ！ああ！おら！おらおらおらおら！」

「んんっ…くっ…ん…ぬう…くっ…んん！ぬっくううううう！」

防ぎきれず、みつともない喘ぎ声が派手に漏れでてしまう。麻田さんはなんの遠慮もなく、腰を滅茶苦茶に前後させていた。爬虫類を思わせる貧弱な体からはまるで結びつかないパワーだった。

「くっ…んん…ぬ…んん！くうううん！」セックスしていた。夫以外の男性と…。ついさっきまで普段通りの日常の中にいたはずなのに…。タブーを犯してしまったことに対する絶望的な感慨が確かにあった。

けれど、それよりも…。

（はあ…大きい…やっぱり…大きすぎるよ…麻田さん…）

私は肉体を襲う圧倒的な力の波濤に、無惨なまでに翻弄されていたのだった…。

当然最初は濡れてもいないので痛かった。けれどほどなくして、彼のペニスは膣内をとて

スムーズに走りだす。

「なはは！ああ、最高！うりやうりやうりやうりや！そおれ！パコパコパコパコパコ！」

「くっ…んん…ぬくっ…んんっ！…く…ん…ん…」

麻田さんは直線的なピストンを延々繰り返した。生の性器同士が激しく摩擦し合う。時折奥まで到達した亀頭の先端が、子宮の入り口の敏感な部分に暴力的にぶつかる。私の体がぶるつと震える。パンパンパンパンッと、彼の腿と私のお尻が叩き合う音が弾ける。腰を曲げた情けない中腰の私は、頭を下げて必死に耐える。（はあ…すごい…んんっ…大きい…激しい…くっ…いや…）

「おい、佐月！俺と別れてから、旦那とこんな風に毎日マンコしまくってたのか？どうなんだ？ええっ！」

「んん…くっ…ん…ぬう…」

「おら！ちゃんと答えんかい！」

「はあっ！んん…い…いえ…ぬぐっ…く…あ…あんまり…ぐっ…あんまり…してません…く…んんっ！」

「そうなのか？意外だな。俺とはいっぱいしてたのにな？おらおらおらおら！」

「くっ…ぬふ…んん！くっ…ん…」

「おらっ！どれくらいの頻度で俺とマンコしてたのか！計何回くらい俺とマンコしたのか！自分の口で言ってみろ！」

「んん！くっ…ん…ぬ…」

（はあ…ああ…ああ…）

「くっ…ああっ！はあ…ま…ま…毎日のように…んっ…し…して…してました…くっ！んん！はあ…あ…会う度に…んん！い…一日五回とか…じゅ…十回とか…はあ…し…し

てました…くううう！ああ…んっ…くっ…ご  
…合計は…ああ…せ…せ…千回くらいだと思  
います…んんん！」

（あ……やばい…やばいかも…）

命令に従って、質問に正直に答えただけだった。  
仕方なく、そうしただけだった。

だけど私は、ゾクツとしてしまった。

私の深い部分のなにかが、芯から震えあがっ  
てしまった。

嫌な予感がした。とても嫌な予感がした。

（ああ…ダメ…ダメかも…これ……ダメかも  
…）

「がはは！千回もしてたのか！こんな瀟洒な  
家に住んでる気品に溢れたお母さんが！その  
昔こんなキモ男と千回もマンコしてたのか！  
なにしてんだよ（笑）！ダメじゃねえかよ！お  
らおらおらおらおら！」